



©Yuki Nakase

イーストリバーの花火大会

照明と安全

最近、照明家の友人たちが立て続けに業務中に怪我をしました。1人は、イントレに照明器材を仕込んでいる最中に足を踏み外して落下、もう1人は、キャスター付きの器材箱をビルから運び出しトラックへ積み込む際に段差で箱が転倒して下敷きになるという事故です。それぞれの現場では作業が一時停止し緊迫した空気に包まれ、彼らは現場監督である照明チーフとともに病院へと向かいました。幸い彼らの怪我はその後の照明家としての活動に大きな支障を来すものではありませんでしたが、イントレから落下したとき明かりつくりの最中であつたため、作業に必要な明るさが確保されていなかったのではないかと、下敷きになって怪我をするほど大きな器材箱は2人で運ぶべきではなかったかなど、安全管理に課題が残りました。

友人の例以外にも、現場での事故や怪我の話は頻繁に仲間内の話題に上がります。ある照明家は脚立から落ちて大怪我を負い照明家としての生命が絶たれたことを、クライアントに対して訴訟を起こしたと聞きました。照明会社を訴えるのではなくクライアントを訴えたために、照明会社としては照明家とクライアントの両者を失う二重苦だったそうです。

安全管理の徹底がクライアントの求めるデザインの実現を支えるとは、テレビと舞台の制作に関わるプロフェッショナルなら理解できるでしょう。ニューヨークでも、各照明会社と各ユニオンは安全確保のためにさまざまな決まりを定めています。ほとんどの劇場での照明業務ではヘルメットの着用を求められませんが、建築会社が施工するイベント現場の多くは、ヘルメットと反射材付き作業服の着用が強制されます。安全靴を履いていないと現場に入れないケースもあります。二日酔いも含め、アルコールと薬

物の影響下にある身体で現場に出向いた場合は解雇と明言する照明会社もあります。高所作業車には籠に1人と各足に1人ずつ合計5人の照明家がつかねばならないユニオンもあれば、籠が高所にあるままでの移動を禁止する現場もあります。怪我人が出ることは信用と保険料に影響するので、どの団体もそれぞれに安全を確保する工夫を凝らしています。

ただし、どれだけ会社やユニオンが安全対策を施しても、最終的には個人の意識が安全管理の最大要因であると言っても過言ではありません。事実、ユニオンに加入していないフリーランスの照明家が複数の照明会社から仕事を受注することは日常茶飯事で、現場をはしごして睡眠不足で現場入りすることを照明会社は防ぎきれません。私自身は大きな事故にあったことはありませんが、ヒヤリとした経験は何度かあり、思い返すとそれらの多くは長時間勤務後の撤収の最中です。たとえば、カムロックのコネクター2つが私の頭の真横に降り落ちてきたときは、16時間勤務後の撤収中で、照明を始めて間もない作業員が重いケーブルをひとまとめにしているロープを不注意に解きました。睡眠不足と深夜作業が注意力を散漫にさせるのは防ぎようがないように感じます。

厳しい制作スケジュールや施工の遅れなど、照明家のコントロールが及ばない理由で長時間勤務が強いられることも多くありますが、深夜勤務や残業が高収入につながることや、キャリアアップのために無理をして仕事を受注しがちなのが現実です。つつい照明に没頭してしまう自分を制御できればいいのですが、好きなことを仕事にしているだけになかなか難しいですね。